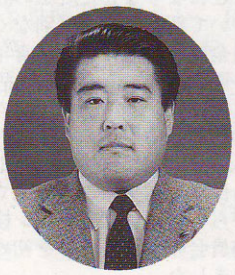
20th ANNIVERSARY 我ら歴史の糸を紡がむ Develop Your New Stage
1995.7 No.99
Handsome
発行人 鳥取県西部中小企業青年中央会 会長 藤居忠弘 編集責任者 小原得雄 印刷所 東京印刷㈱

1年を振り返って



会長
藤居忠弘

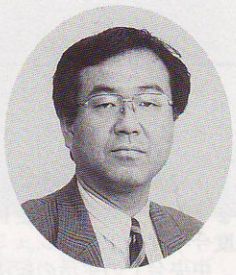
平成6年度わが西部青年中央会は第20期という節目の年度であり、会の運営において大変重要なこの時期に会長という大役を仰せつかり、非常に緊張した、そして充実した1年を送らせて頂きました。

毎年、皆生トライアスロンで始まる青年中央会の行事ですが、今年度は20周年記念行事でスタート致しました。高田直前会長から受け取ったバトンは非常に重く、落とさないように、リタイヤしないように、阿部次年度会長に間もなくバトンタッチできる所まで無事来る事が出来たのも、偏に副会長はじめ役員、会員の皆様のご協力があったからだと感謝申し上げる次第であります。

年度当初には「現会員　朝妻貢君の死」という、本当にショッキングな出来事がありました。ここに改めてお悔やみ申し上げますとともに、同年代を生きる者として、命のはかなさを痛感しました。

当初既存の常設委員会で、今後の青年中央会のあり方を模索する「中長期ビジョン」について検討してもらうつもりでおりましたが、何分にも今後の当会の方向を左右する大変重要な事項であり、これは全会員を巻き込んでの大討論会でも開催しなくてはならないのでは、と考え、各委員会から選出されたメンバーによる特別委員会を10月に入ってから結成致しました。それぞれの委員会におきましては、各テーマがあるにもかかわらず、後期には「中長期ビジョンについて」分科会を開いて頂き、大変ご迷惑をおかけいたしましたが、本年5月例会の「中長期ビジョン発表会」と次年度への「提言書」をもって、この特別委員会設立の目的が達成できたのではないかと考えております。

何はともあれこの1年間、各委員会には度々顔を出させて頂き、有意義な時を皆様とともに過ごした事は、私の一生の思い出となることだと思います。本当に有難うございました。また、会の運営におきましていろいろお世話いただきました事務局、OB諸兄、各地区青年中央会の会員、青経連のメンバー等々、本当に多くの皆様方のお世話になりました。最後になりましたが、皆様方に感謝を申し上げまして、挨拶とさせて頂きます。



県会長
角田茂樹

昨年の7月に鳥取県青年中央会会長という大役を引き受けさせていただき早いもので1年が過ぎようとしております。特に今年度は創立20周年という節目の年にあたり、自分の様な者ができるのだろうか、という不安とプレッシャーの中でのスタートとなりました。

11月に開催された横浜での全国大会への参加を初め、県の経営研修会、2月に予定していた関西方面への国内研修は1月に起こった阪神大震災により5月に順延したにもかかわらず、各地区より56名の参加をいただき、高松では会員相互の交流を深めるために、懇親会も開催いたしました。残る大きな事業としては7月22日に行う県青年中央会の20周年記念事業があります。

残すところ、1ヵ月ばかりになりましたが各地区の会員の皆様の絶大なる協力のもと何とか成功させたいと思っております。

最後になりましたがこの1年間私をささえていただきました各地区会員の皆様を始め関係団体の皆様に対し深く感謝申し上げます。

本当に有難うございました。

…… 副会長１年を振り返って ……

森永修二

皆様、この一年間大変お世話になり、ありがとうございました。

この記念すべき20周年という節目に副会長をやらせてもらったことは、今から思いますと大変有難く、私自身一生の思い出として残して行きたいと思います。

一年間、様々な事がありましたが、一番良かったと思うことは、中長期ビジョン策定における各委員会でのディスカッションだと思います。明日の青年中央会を考えながら、会員の皆が本音で話が出来たと思いますし、前向きな意見も数多く出たと思います。

只、個人によりそれぞれ意見は違うわけですが、「今後青年中央会を良くする為にはどうすればよいのか」「自己の研鑽に努める為には何をすればよいのか」この点から物事を考えて行けば、自ずと解答は出てくると思います。

私はあと一年で卒業です。最後の一年間燃えて行きたいと思います。

堀尾輝昭

今年一年についての原稿依頼があったとき、松江の病院にて、術後の痛みで、苦しんでいる時であったかもしれませんが、なぜか苦しい思い出しか浮かんできません。２回目の副会長ということで、ある程度今年度の１年のシュミレーションをし、また、中央会での生活の総決算というおもいで、出発したはずでしたが、どうも筆が進みません。一年をふりかえってというお話をするのに、ほとんどの方々がたぶん、充実した一年であったと言われると思います。そういう充実感のない自分自身に対して悔しい思いがしています。

そういう中で、ほっとしたといいますか、おもいが叶ったといいますか、やっぱり中央会は中央会。と思った事がふたつあります。

１つは、かねてからの懸念であった、会員の会への思いを再認識させ、そして、意識の高揚の場として中長期ビジョン検討委員会がもたれた事です。会員の本音がたくさん噴出し、その中でも、おごり・あまえの感覚の会員の多いという事が分かっただけでも大収穫だと思いました。

もう１つは、「にんじんの会」なるものが自然発生的に登場し、中央会の今までの歴史を踏みにじる事なしに、立派に友愛を深めた事です。

最後になりましたが、総務委員会のみなさんには、12ヵ月の長い期間様々な事業をこなして頂きました。深く敬意を表します。

一年間お世話になりました。

松岡　晃

入会以来思ってもいなかった副会長を藤居会長のもとで受けさせて頂きましてから、あっという間の一年間でした。

その間、担当の地域交流委員会の影委員長を始め、会員の皆様にはこれといった事が出来ず、本当に申し訳なく思っております。

しかし、私なりにプレッシャーを感じましたが、振り返ってみますとこの一年間自分にとって大変意義ある年であった様に思います。

我々の年代は家庭においても社会においても企業においても重要な立場であり、私にとって最大の研鑽の年になり、今後の人生に影響を与えることになると思います。

年度は終了しましたが、地域交流委員会が推めている「オールジャパン　ジュニアトライアスロン　ＩＮ岸本」が８月20日とせまっています。いろいろありましたが、ここまで来た以上何とか成功させたいと思っています。皆様のご協力をお願いして一年間を締め括りたいと思います。

本当にありがとうございました。

小原得雄

「長いようで短くそしてヤッパリ長かったなぁ」という一年が終わろうとしています。藤居会長より今年度の副会長にと要請をいただいたのが、昨年の３月頃。当時は、20周年準備委員会で副委員長として記念式典の準備に余念がなく、また二度目ということもあり、さして深く悩みもせずに引き受けさせていただいたように思います。

担当した委員会は、フレッシュ委員会と広報委員会。私自身両方の委員会に一度も在籍したことがなかったため、新鮮な気持で担当することができたと思います。両委員会の委員長、副委員長ともに責任感にあふれ、委員会の舵取りには最適な方々でした。委員会のメンバー一人一人に気持ちを割き、素晴らしいリーダーシップを発揮されたと思います。本当にご苦労様でした。

また、10月からはありがたいことに（？）特別委員会「中長期ビジョン検討委員会」の担当もすることになりました。この委員会では、「現在と今後のあり方」について新旧会員の区別なく、白熱した議論が展開されました。会員全員で真剣に「西部青年中央会」という団体を考えてみるという画期的な試みだったと思います。アンケートの驚異的な回収率（91％）、分科会発表会の出席率をみても、会員の関心の高さを物語っていると思います。柴谷委員長、門脇副委員長を初めとする委員の皆様、連日にわたる議論、夜を徹しての資料、アンケート作成等本当にご苦労様でした。また、独自の事業計画がありながらも、中長期ビジョン検討委員会にご協力いただきました他の委員会の委員長さんを初め委員の皆さん、本当にありがとうございました。

皆さんのお蔭で、中央会を十二分に満喫できた楽しい一年間でした。

松本　啓

社外行事にあっては青年中央会を優先とすべく自分なりに意気込んでスタートしたこの一年でしたが、藤居会長を充分に補佐することができなかった点、藤森・土井両委員長のフォローが充分できなかった点、大いに反省しています。

又、初めて執行部に入らせて頂き、企業とは違った組織運営の難しさを肌で感じ、自分なりにいい勉強をさせてもらったなというのが今の実感です。しかし乍ら、労務、中海圏開発両委員会とも活発に活動して頂き、委員長、副委員長はじめ両委員会のメンバーに心から感謝申し上げます。

一年間ありがとうございました。

西山裕二

月日の経つのは早いもので、昨年の四月に重谷副会長、佐々木ＯＢより「次年度の副会長を承諾しろ。」と言われ、光栄に思いつつ、その重責に対し、苦慮の末、受諾してからもう１年が過ぎました。今、顧みれば、先の提言は、未熟な私にこの一年間で多くのことを学びなさいとの親心からではなかったかと思い深く感謝しております。

意欲と言うよりはまず緊張と不安のスタートでしたが、皆生一泊研修会に於いての夜を徹しての意見交換、会員ならびにＯＢ会員の皆様のご協力、ご指導により、７月のトライアスロン・10月のＯＢ交流会等を無事終了し、何とか無難なスタートが切れたかと思います。又、年度半ば新たに中長期ビジョン検討委員会の設置をすることになり、各会員が中央会の将来を真剣に語り合えた事など、想い出深い一年でありました。この貴重な経験を通じ、いかに時間を有意義に活用するのかを特に学んだような気がします。

最後に藤居会長をはじめ役員の皆様、観光流通・赤石、金融税務・岡空両委員長また委員会の皆様には、頼りない私を盛りたてて頂き、感謝の気持でいっぱいです。

今後とも永いお付き合いをお願い致します。

青経連合同講演会報告

さる6月3日（土）夜、ベルライト米子にて野坂建設大臣を迎え、青経連合同講演会が開催された。

大臣は「中海圏時代における鳥取西部地域のグランドデザイン」という演題で西部の将来展望を講演され、会員や県西部の市町村長などの出席者に、国土開発や生活環境づくりの観点から、米子市を中心とした広域生活圏を形成することが課題であることを指摘された。

まず阪神大震災の混乱をあげ、日本海国土軸の重要性から山陰新幹線、道路整備、米子駅の高架を実現に向けて運動することを強調され、又西部地域だけでなく安来市を含めた中海圏として動いていくことを指摘された。国土の均衡ある発展について大臣は、10年後には米子市と境港市の合併も可能であるとし、安全、利便、快適性のある町づくりの為、境港市、米子市、西伯郡、日野郡を含めた生活圏の拡大という大きな構想で、大西部圏域構想を地方拠点都市として実現していくことが重要になると語った。そのような広域生活圏を形成するために、住民は市民参加の計画立案に努力し、各市町村は連携して機能分担をしていくことが必要と指摘された。

講演は、長良川河口堰の問題に始まり、将来の日本の人口の減少による産業の空洞化、生活環境の整備などグローバルな話と、県西部の将来についての提言に出席者の共感を起こしつつ、短時間に終わったと感じられる程、内容のあるものであった。

企業説明会

6月17日　食品工業団地ホールに於いて、労務委員会の本年度活動の集大成である企業説明会が行われた。　地域活性化の為、若い力を地場企業へとの主旨のもとに、この日の開催となった。参加企業22社、出席されたのは県西部15校高等学校の就職担当の23名の先生方に及んだ。お互い初めての試みであり最初は少し固い雰囲気であったが、次第に熱がこもっていった。持ち時間の5分は少し短い様で各企業紹介も十分な説明に至らなかったのが少し残念であった。終了後ある先生に感想をたずねた所「大変有意義でした。出来れば生徒や保護者に直接話しを聞く機会が欲しい。ぜひ続けて欲しい。」とのこと。法的な規制もあり開催日時や方法については今後の勉強課題であるが、大きな成果ではなかったろうか。当日のアンケート成果を広報紙面にて紹介したいものである。　尚、当日は財団法人ふるさと定住機構の小寺事務局長にもおこしいただいた。藤森委員長以下労務委員会の皆さんの努力に対し拍手を送りたいと思います。ご苦労様でした。　H．T．

皆勤賞

（政治行政）牛込淳彦、
（金融税務）岡空晴夫、高井秀司
（広　　報）谷口勉
（フレッシュ）足立達朗、橋井英明
（労　　務）藤森英樹
（地域交流）景　幹雄、音田　猛
（総　　務）市位清明、松田則一

精勤賞

（政治行政）長谷川義明、足立　聡、井上晴雄、渡部光典
（カルチャー）山中隆司、九重　卓
（金融税務）遠藤健司、木村　繁
（観光流通）浜田一哉、崎津　正、長谷川郁
（広　　報）夏山裕一、望月真彦、村上宏行
（労　　務）樋口一夫、松岡正高、由島康平、水　康徳
（中海圏開発）土井一朗、武海　章
（地域交流）石谷　勝、高田耕平、和田健二
（総　　務）北野　実、倉敷裕史、戸野雅弘、湯原俊二、田川廣美

妻の本音

「わたしの夫」

藤居 朱美

もうすぐ会長の大任も終ろうとしていますが、この一年間とても楽しんで中央会の活動をさせていただいたようでした。あれだけ毎日出かけて身体がとても心配でしたが、出ない日の方がかえって体調が悪かったみたいでした。（そういえば歴代会長の皆様とてもタフな方ばかりですよね）

夫が中央会に入会して、いろんな面で皆様に「大人」にしていただいたと、とても感謝しております（ホントに本音です。）身体は重いのに中身は軽い夫に付き合って下さって有難うございます。会員の方、一人、一人に御礼を申し上げます。

夫を一言でいうと…子供のあてくじでいう「あたり」でした。二人でいることで１＋１＝２ではなく、１＋１＝３？５？にもなったと思います。この世で一番私のことを理解してくれる心の広い人です。

夫へ一言…死ぬまでに二人でモナコＧＰへ行きましょうね。お腹の肉を削って長生きして下さい。

聞いてごしない Part 8

「てなぐさみのたわごと」

ようやくこれで無罪放免だと思うと、この上ない解放感を感じる。呪縛から逃れることができたと言うべきか。12回目の「聞いてごしない」である。人様に聞いてもらいたい話題など全然持ち合わせていなかった私にとって、このコラムの担当は苦しみの連続であった。原稿締切日をクリアしたのは、たったの３回だけ。後は、すべて冷や汗ものだった。催促の電話があると「アッ！忘れちょった、スグ書くけん」なんてとぼけた発言をし、委員長を唖然とさせたこともあった。その実、朝から一行も書けず髪の毛を掻きむしっていたくせに。

不謹慎な話だが、私はただの一度なりとも酒を飲まずに原稿を書いたことはなかった。というより酒の勢いなくしては何も書けなかったというのが正しい。アルコールが切れた状態では全く思考が停止してしまうのだ。幸い、飲まない夜はないので、気が向いたときにワープロに向かい、支離滅裂な文章をとりあえず入力しておく。それをアルコール気が抜けたときに冷静に読み、修正を加えるのである。天声人語の筆者など、時には自殺したくなるほどの苦しみを感じるらしいが、私はたった12回でも死ぬ苦しみだった。文章は読むに限る。書くことは確実に寿命を縮めると思った。

この間、中央会のＦ氏が朝日町でリサイタルを開くというので行ってみた。会場となるスナックの階段の壁には、何と花束を持ってスーツに身を固めたその人が、何の屈託もない笑みを浮かべてポスターとなっており、一瞬言葉を失った。１ｓｔリサイタルと書いてあり、壁一面所狭しと貼ってある。会場内は招待客で一杯、すごい盛り上がりである。スポットライトを浴びながら自分に酔って歌うその人の様を見、何とも羨ましく感じた。ある大役を、今終えようとしているその人の爽やかな晴れ姿だった。始まりがあれば、必ず終わりがある。終わりがあるからこそまた始まりに立ち向かえるのだ。「役というのは、上手に成し遂げることではない、精一杯誠を尽くすことなんだ！」と実感した。

ネタ不足から我が家の実態を晒し、家内の逆鱗に触れたこともあったが、とまれ何とかヤリクリに努め、無事責任を果たしたということにさせていただく。１年間戯言にお付き合い戴いた読者の皆さんに感謝しつつ、ひとまず私は手慰みの手を休め、充電期間に入ることとする。　（文・てなぐさみ）

通常総会案内

日　時　　７月17日（月）　**18：30～**
場　所　　米子国際ホテル

※尚、総会終了後懇親会を行いますのでお車は御遠慮下さい。
※出席の有無を**７月11日**までに返信ハガキにてご回示下さい。

編集後記

先日、浜河崎団地の海岸にアサリ（実はアサリではないそうだが）採りにでかけた。新聞・テレビ等で話題になっており、後学のために、いや今の話題に遅れまいと出かけてみた。副委員長のＴ氏のご指導もあり、おかげでバケツ２杯の大漁であった。

今年に入って、「阪神大震災」「地下鉄サリン事件」、そして先日は「ハイジャック事件」などの記事が新聞の社会面を占有。又、経済面では「円高」「株価の低迷」そして「超低金利時代突入」と、これも話題には事欠かない。そして身近なところでも、最近境港では「いわしの不漁」に困惑している。当事者にとっては本当に深刻な問題であり、他人事ではない。

ともすれば、自分に関係ないと思えば「話題」で済まされてしまいがちである。振り返って、自分の会社では「危機管理」がなされているだろうか。今一度再点検をしてみたいものである。

７月号「Handsome」の編集を終え、12回とぎれることなく発行できたことにホッとしている。読者の皆様のご協力に心より感謝申し上げたい。